環境共生最新事例見学レポート　平成 30 年度第 2 回　1 日目

南三陸町さんさん商店街

宮城県南三陸町志津川地区の「さんさん商店街」は、東日本大震災の翌月に地元事業者により始まった「復興市（いち）」が前身となり、翌 2012 年（H24 年）２月には仮設商店街が開設された。「サンサンと輝く太陽のように、笑顔とパワーに満ちた南三陸の商店街にしたい」という願いの込もったネーミングのとおり、本設までの５年間で 80 万人の来場者が訪れる、復興を目指す南三陸町の象徴的な存在となっていた。
（実施日時：2018 年 12 月 3 日　参加者数 12 名）

■はじめに

「さんさん商店街」はその名前にちなんで 2017 年（H29 年）３月３日に本設としてオープンを果たし、その後の一年半で来場者数は 100 万人を突破した。
同商店街の移転新築工事は、安全・安心かつにぎわいのある市街地を形成し、観光客需要を喚起していくことを目的に掲げた「南三陸まちなか再生計画」の一環として実施された。本格復興を世界に示すシンボルとして、グランドデザインの第一歩に「さんさん商店街」が再建された。設計は、新市街地のグランドデザインを手がける建築家 隈研吾氏が担当した。

■施設の概要

□基本計画

南三陸町志津川地区は 20 mを超える津波により低地部の市街地が壊滅的な被害を受けたことから、一帯は海抜 10 mまでかさ上げされている。商店街は海を望むこの高台の約２万㎡の敷地に、木造平屋建て約 450 ～ 500㎡の店舗６棟とトイレ棟と、イベントなどが開催できる多目的スペースや駐車場で構成されている。

○店舗棟は海に向かって設けられたメインストリートを挟む形で配棟され、各棟の角度を部妙に変えて配置することで、目の錯覚を生かして南三陸の美しい海との一体感を得られるよう工夫がされている。
○各棟の建物は、軒を大きく跳ね出すことで軒下に商品を陳列しやすいようデザインされている。この軒下が店内と外部空間とをつなぐ中間領域となって、縁側のように人と人との交流を促す昔ながらの人間味あふれる商店街の風景をつくることが意図されている。

□パワービルド工法

移転新築工事は、ナイス㈱が地元建設会社２社と組成した「ナイス・志津川・山庄特定建設共同企業体」により進められた。建物にはナイスグループオリジナルの金物接合による軸組工法「パワービルド工法」が用いられている。同工法は、プレカット加工された柱と梁に接合金物をはめ込み、ドリフトピンで固定する工法で、ボルトとナットを使用しない省施工でありながら高い耐震性と精度を保ち、かつ短い工期での施工を実現する。同工事において、各棟の躯体建て方工事は約 10 日という短期間で完了している。

□木肌の美しい南三陸杉

ナイス㈱は建設工事での参画に加え、日本最大規模の木材流通プラットフォームと多産地連携システムを生かし、木質化提案と調達の役割を担った。 来訪者の手に触れる部分にはできる限り地元の木材を使いたいという隈氏の意向を受けて、木肌の美しさで知られる地元「南三陸杉」を外壁及び建物正面に用いられる縦ルーバー、下屋部分のポーチ柱に用いることを提案し採用された。外壁及び縦ルーバーは地元の製材事業者である丸平木材㈱にて製材され、木肌の色味がより美しく出るよう低温乾燥が施されたものが用いられた。また、ポーチ柱は㈱山大にて製品化された JAS 機械等級区分製材品を使用した。

その他、全ての木材をコーディネートし調達を行ったが、地域材ですべてを賄うと調達に時間や手間がかかり、生産量も限られるためコストもかさむことから、羽柄材には国産のスギ材、構造材には外国産の JAS 構造用集成材を使用し、品質を確保しつつ全体のコストを抑えることができた。今回使用した木材の材積は、南三陸杉が 54.45m^3、国産のスギ材が 74.88m^3 に上る。防腐処理は雨がかりの部分の全てに、耐候性の高い塗装を施し、劣化対策を講じている。

□店舗構成

店舗の構成は、飲食店８店舗、生活関連７店舗、鮮魚５店舗、菓子３店舗、理容室２店舗、葬祭関連１店舗、コンビニエンスストア１店舗、産地直売１店舗の、計 28 店舗となっている（平成 30 年 12 月時点）。中央の通りには、遠方から訪れる修学旅行や観光などの団体客に対応するため、フードコート機能を持った「さんさんコート」を配置する。

○商店街の各所には名物のタコをモチーフにしたサインが設けられている。コミュニケーションディレクター・アートディレクターの森本千絵氏によるデザインで、同氏は、NHK の大河ドラマや連続テレビ小説のタイトルワークやポスター等を手がけ、有名アーティストのジャケットやＰＶデザインなど多岐に渡って活躍する気鋭のクリエーターである。
○また、今や押しも押されぬ南三陸のブランドグルメとなった「南三陸キラキラ丼」は、参画店 11 店舗中６店舗がさんさん商店街で営業しており、四季に応じた４種類の海鮮丼を観光客に提供している。

商店街を運営する㈱南三陸まちづくり未来は、さんさん商店街の他に車で 15 分ほど離れた歌津地区にある『南三陸ハマーレ歌津』の運営も行っている。広域からのアクセスに優れるさんさん商店街は関東を中心とする県外からの集客で賑わいを見せ、一方のハマーレ歌津（８店舗）は地元住民の生活を支える欠かせない商店街となっている。

1. 鮮魚店
2,3. さんさんコートの様子
4. 人気のキラキラ丼（写真 / 南三陸さんさん商店街 HP より）
5. 店舗の外壁に貼られた「南三陸の記憶」

南三陸体験学習プログラム

(一社) 南三陸町観光協会では「南三陸体験学習プログラム」を実施し、南三陸町の今と未来、人と自然との関わりなど様々なプログラムを通じて情報発信を行っている。その中の一つである「語り部による学びのプログラム」に参加した。
このプログラムは、" 震災で得た教訓を後世に伝える " をテーマに大震災を経験して学んだこと、教訓になったことを伝え、次の世代に安心で安全な未来を引き継ぐことを目的に行われている。今回の見学会では、さんさん商店街から語り部とともにバスに同乗しながらの約 1 時間のコースを巡った。
（実施日時：2018 年 12 月 3 日　参加者数 12 名）

■語り部による学びのプログラム

□南三陸体験学習プログラム

語り部として同行いただいた芳賀長恒氏は当時漁業協同組合に勤務され、震災時には出張中であり直接の被害は逃れたが、自宅などすべてが津波で流され、電話などはつながらない状況の中、不安にかられながらようやく南三陸町に戻って見た光景が忘れられないと語ってくれた。

□防災対策庁舎の悲劇

さんさん商店街の北側、八幡川に沿った造成中の土地の一角には数体の地蔵と献花台が設置され、そこから南三陸町防災庁舎の遺構を望むことができる。語り部の口からは、懸命に避難を呼びかけ不運にも最後まで職務を果たされた職員の方々、防災無線で気丈に呼びかけを続けた女性職員について語り継いでいく責任があるとおっしゃっていた。
まちの中心部にあった防災対策庁舎では、震度 6 弱の地震発生後まもなく、高台への避難開始の案内を開始した。その後気象庁の大津波警報が発令され、高さ 6 m の津波が到達するとのアナウンスが 3 階建ての防災庁舎の窓のない 2 階から休むことなく続けられた。庁舎の高さは 12 m、そこに高さ 15.5 mの津波が襲った。当時防災対策庁舎では遠藤未希（当時 24 歳）さんを含む職員 33 名、消防、警察 10 名、計 43 名が行方不明となった。
現在、庁舎建物の骨組みが震災の遺構として遺され、周辺は震災復興祈念公園として整備が進められている。防災対策庁舎の遺構保存には紆余曲折の議論があったが、宮城県知事の働きかけにより 2031 年までの 20 年間、県の管理による保存が決まる。さんさん商店街のある再生区域と八幡川を挟んで対岸に位置する復興祈念公園とをつなぐ木道橋（人道橋）が慰霊のための象徴的な空間として整備されることとなった。

□復興市街地整備の状況

商店街を離れ、高台の中央団地へと向かう車中から災害復興住宅の様子を見学した。
津波被害を受けた海側低地部への居住は不可となったことから、住民たちは高台への移転が求められることになった。そこで、被災した住民がこの地で住み続けるために用意された選択肢は 2 つ。
①災害公営住宅への転居（集合住宅と戸建住宅）
② 80 坪～ 120 坪の宅地を買うか借りる（防災集団移転事業）

災害公営住宅（右）戸建住宅
（下）戸建住宅と集合住宅

また、低地部に残る不動産の取扱いは以下の方針となった。
①従前土地に住居建物がある場合、国が買い取る
②駐車場、工場建物があった場合、造成地に換地
次に、海岸線を走り、海沿いに建つ「高野会館」について説明を受けた。
当時この建物では老人クラブの芸能大会が開かれており、320 人が屋上に避難して難を逃れている。元漁師だった会館の営業部長が海を見ると、海面が大きく下がっていたため、「大きな津波が来るはずだ。外に出たら危ない」と判断したことが功を奏した。この建物は、高台の岩盤の上に建てられたことで被害が最小限だったことから、震災直後より被災住民の受け入れを精力的に行ったことで報道にも頻繁に取り上げられた「南三陸ホテル観洋」の所有する建物で、女将が自主的に遺構として保存を決めている。志津川地区の被災エリアに残る建物は、防災対策庁舎とこの高野会館の 2 棟のみとなった。

□ 22.6m の津波が襲った旧戸倉中学校

次に向かった 20m の高台に建つ旧戸倉中学校は、湾状の地形の奥まった場所であることから、防潮堤高さ 8.7 mを遥かに超えて海抜 22.6 mまで津波が達した。すぐ隣の低地部分に建っていた戸倉小学校は 3 階部分まで津波が襲ったが、教師と生徒 91 名、隣接する保育園児 11 名、付近の住民合わせて約 200 名が裏山の赤い鳥居を目指して避難し無事だった。日頃から、チリ地震の体験を両親から聞いていた女性教諭が戸倉小学校におり、揺れが収まったあと、裏山へ避難するよう進言したことで 200 名の命を救う結果につながった。
なお、旧戸倉中学校は 3 億 3 千万円かけて公民館へと改修されているが、時計は当時の時刻を指したまま遺されている。

旧戸倉中学校（右）22.6 mの津波の
爪痕（下）止まったままの時計

□イースター島の石を使って彫られた唯一のモアイ像

町内には 7 ヶ所のモアイスポットがある。これはチリ地震津波から 30 年後の 1990 年に、チリと旧志津川町が友好姉妹都市を結んだことに由来する。このときの津波により旧志津川町内だけで 41 名が犠牲となり、312 戸の家屋が流失、倒壊 653 戸、半壊 364 戸、浸水 566 戸の壊滅的な被害を受けている。
1991 年のふるさと創生事業の一環としてチリ人彫刻家の手によるモアイ像が志津川地区の松原公園に設置され、そして、東日本の震災を受けて、イースター島の石を使い彫られたモアイ像が世界で初めて海を渡ってやってきた。H25 年 10 月 23 日に白珊瑚と黒曜石で作られた眼を入れたモアイ像がさんさん商店街の敷地に飾られることとなった。

□漁業者への支援

宮城県の水産業は国内有数の漁獲高を誇り、津波により 1 万 2 千隻あった船は 1 千隻となったことで、漁業者への影響は計り知れない状況であった。そこで国は漁業の復興に全面的に支援することを約束し、漁業者への救済措置として以下の事業が実施された。
①瓦礫の撤去作業
8 時から 16 時まで海の瓦礫の撤去作業、岸壁の清掃作業を約 1 年間行う。これにより月 30 万円ほどの収入が確保され、当面の生活が担保された。作業に従事した証拠として、デジカメではなくフィルムカメラで全員が写った写真を毎日撮影することが課せられた。
②養殖の代行
養殖に必要な種苗代、資材、人件費は国が支給、その代り水揚げされたものはすべて国に引き渡す、給料制のような支援事業。個人事業者である漁師たちをグループ化して作業させることで苦労はあったが、約 4 年間行われた。その結果、元の船数に戻ることができ、現在の水揚げは震災前の 8 割まで回復している。
新たな問題として、地震によって 75 ｃm沈下した地盤が、その後ゆっくりと、現在まで 27cm 隆起している。隆起を考慮せずに復旧した場所が「高すぎる岸壁」となり、漁港の機能にも支障が生じ始めている。

□南三陸町役場

防災対策庁舎を残して全壊した役場庁舎は、海抜 60 メートルの高台に移転し 2017 年（H29 年） 9 月 4 日に業務を開始した。設計はプロポーザルにより選定された㈱久米設計とピークスタジオ一級建築士事務所の協働による。鉄筋コンクリート造 3 階建て、延べ面積 3,772.6 ㎡の建物で、南三陸杉をふんだんに使って、来庁者を暖かく迎え入れている空間がとても心地よく感じられた。
公共建築としては国内初の『FSC（Forest Stewardship Council、森林管理協議会）全体プロジェクト認証を取得している。『FSC 認証』とは、持続的な木材資源調達を可能にするために、社会的・経済的・環境的に適切な管理がなされている森林を認証するもので、認証取得には、使用される木材原料・製品の費用または体積の 50% 以上が森林認証材、その他の木材原料・製品が管理木材またはリサイクル材とする必要がある。
久米設計の提案は、「『人と人』がつながり、『まちとまち』がつながる広場型タウンセンター」をうたっており、窓口となる執務スペースを 1 階部分に集約し、その横にマチドマと呼ぶ「みんなが自由に集まれる」スペースを連続させている。